

CeMI 気象防災支援・研究センター

News Letter

Contents

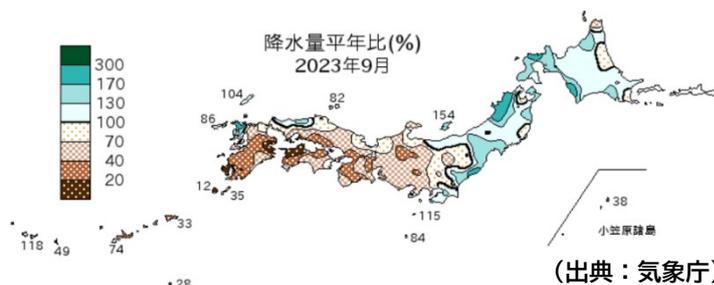
1. 2023年の台風
2. 能登半島の地震活動
3. 昨年の日本の年平均気温が過去最高に！

1 2023年の台風

2023年の台風の発生数は17個でした。気象庁では1951〔昭和26〕年から台風に関する統計の整理をしていますが、1年間の発生数が17個というのは2010年の14個、1998年の16個について3番目に少ない発生数でした。また、上陸した台風は8月15日の早朝、和歌山県の潮岬付近に上陸した第7号、ひとつでした。平年値でみると発生数は25.1個、上陸数は3個ですから、いずれも平年より少なかったことがわかります。

近年、地球温暖化の話題の中で、気温の上昇がそのまま続くと今世紀末頃には台風の発生数は少なくなるものの、強い台風が増えるとのシミュレーション結果もありますが、これまでの過去73年間の記録からは、台風の発生数が減る傾向や強い台風が増える傾向は全く見られません。台風の発生数は年々の変動が大きく、発生数が最も多かった1967年は39個もの台風が発生しています。

昨年は9月、10月の台風シーズンに発生数がわずかに4個〔平年は8.4個〕と少なく、さらに上陸した台風もなかったために秋に入って雨が少なく、西日本から東日本にかけては少雨で、一部では渇水となりました。さらに、残暑から続いて秋も各地で高温傾向が続いたため、初冬の頃にかけて農作物の生育などに影響が出ました。



上の図は2023年9月の降水量の平年比です。西日本から東日本の広い範囲で平年の70%以下で、四国や九州の一部では平年の20%にも満たない地方もありました。10月もほぼ同様の状況で、秋の少雨が顕著でした。

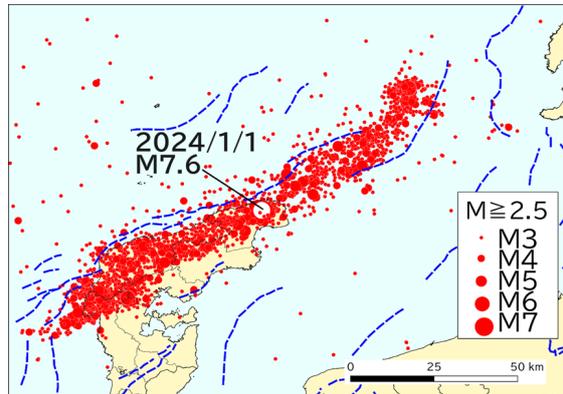
台風は接近、上陸すると雨や風により様々な被害が出ることありますが、農作物や私たちの生活用水などに必要な雨は、直接、間接を問わず多くが台風によってもたらされます。1年の中でも梅雨期と並んで降水量の多いこの時期に、昨年のように台風の影響をほとんど受けなかった年は、いつもとは違ったかたちで影響を受けることになります。台風のように災害をもたらす現象であっても、別の視点で見れば私たちに恩恵をもたらす現象であり、私たちの生活が自然の仕組みの複雑さの中で営まれていることを感じます。



2 能登半島の地震活動

1月1日午後4時10分に能登半島北東部で発生したマグニチュード7.6の地震により、石川県志賀町で震度7、輪島市や珠洲市などで震度6強を観測するなど能登地方で大きな被害が発生しました。この付近では2020年12月から地震活動が活発になっており、2023年5月5日にはマグニチュード6.5の地震が発生し珠洲市で震度6強を観測し、珠洲市を中心に住宅倒壊やがけ崩れなどの被害が発生しました。1日以降、地震活動は活発な状況が続いており、右図に示したとおり能登半島北部を中心として北東-南西に延びる約150kmの広い範囲で地震が発生しています。今回の地震活動について政府の地震調査委員会は、能登半島沖の北東から南西にかけて確認されている複数の活断層（図参照）が関連した可能性が高いとの考えを示しました。

今回の地震は、人が生活している地域の地下の浅い所で発生していることから、足元で地震が発生しているようなもので、マグニチュードがそれほど大きくなくとも大きな揺れになる傾向があります。避難生活や復旧作業にあたっては、大きな揺れに伴う新たな家屋倒壊などへの注意が必要です。



2024年1月1日～1月20日に発生した地震（赤丸）
青破線は活断層（産業技術総合研究所資料をトレース）

また、今回の地震では、石川県の輪島港で1.2m以上の津波を観測するなど、北海道から九州地方にかけての日本海沿岸で津波を観測しました。日本海側で発生する津波は陸地に近い所で発生することから、短い時間で海岸に津波が到達する特徴がありますので、海岸で大きな揺れを感じた場合には、速やかに高台など安全な所に逃げることを心がけてください。

地震活動は徐々に少なくなっているものの活発な状態が続いています。しばらくは地震活動に注意してください。

3 昨年の日本の年平均気温が過去最高に！

気象庁は日本の年平均気温を毎年発表しています。近年は、毎年のように過去最高かそれに匹敵する記録が続いていました。ところが、2023年の年平均気温は、これまでの高温の記録を0.64℃も上回る過去最高を観測したのです。

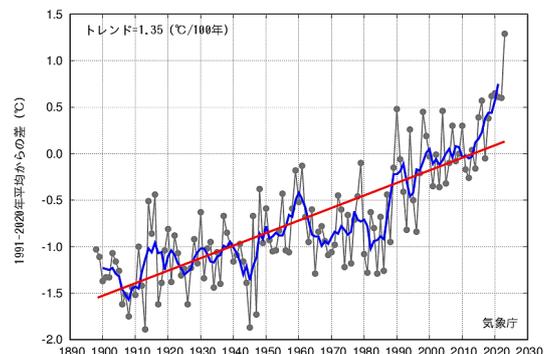
日本の平均気温は、都市化の影響が小さく、地域に偏りがなく、かつ1898年から観測を始めた15地点を使って、平均からの偏差を求めています。それが右下の図で、基準線（0℃）は、1991年から2020年の30年平均を使っています。

図を見ると明らかですが、年々の変動はあるものの基本的に右肩上がりに上昇しています。注目するのは、1990年頃までの気温の上昇は緩やかだったのに比べ、その後は急激に上昇しているところです。1961年から1990年までの平均を基準とすると2023年は2℃も高かったこととなります。

日本の気温が高くなる背景としては、大気中に二酸化炭素などの温室効果ガスが増加していることがあります。2023年の記録的な高温については、年々変動もあるので温暖化だけによるものとは言えませんが、かなりの割合が温

暖化によるものでしょう。

ところで、温暖化が進むと、大気中に含まれる水蒸気量が多くなることから、短時間に降る雨の量が増えることにつながります。アメダスなどの観測データからも短時間強雨の発生回数が増えていることが示されています。今後ますます大雨に対する警戒が必要になるとともに、これまで大雨が少なかった地域でも、大雨の可能性が大きくなったことに対処しなければならない状況になったと言えるのではないのでしょうか。



日本の年平均気温の経年変化（出典：気象庁）



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

📠 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

